

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：英語キャリア・コミュニケーション学科

資格：准教授

氏名：三宅 弘晃

研究分野	研究内容のキーワード
学位	最終学歴
修士（英語学）	京都大学大学院 文学研究科 文献文化学専攻 博士課程 満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
1. Mukogawa English Reader - Threshold to University English	2016年4月	英語のリーディング能力を高めるために、難易度を測定したテキストを作成した。「初期演習」などで活用されている。
2. MUKOGAWA English Grammar	2008年03月	活用文法，コミュニケーショングラマーで使用する英文法書。
3. Mukogawa English Grammar 2007	2007年03月	活用文法，コミュニケーショングラマーで使用する英文法書。
4. Mukogawa English Grammar 2006 - Threshold to University Grammar	2006年03月	(著書の欄参照)
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 文学修士（京都大学）	1998年03月	英語学
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. MUKOGAWA English Grammar (新版)	共	2019年3月	武庫川女子大学出版部	◎三宅弘晃，安達一美，稲毛理津子，山根明敏，竹田明彦 武庫川女子大学文学部英語文化学科および短期大学部英語コミュニケーション学科における文法教育のため、英文法の重要な項目を24に分けて説明した。大学「活用文法」短大「コミュニケーショングラマー」の授業にも用いる。すべてのページの執筆を責任者としておこなった。
2. Mukogawa English Reader - Threshold to University English	共	2016年4月	武庫川女子大学出版部	◎三宅弘晃，西嶋久雄，安達一美，山根明敏 英語のリーディング能力を高めるために、難易度を測定したテキストを作成した。「初期演習」などで活用されている。リーダーとして難易度測定と編集を行った。
3. MUKOGAWA English Reader - Threshold to University English	共	2012年4月	武庫川女子大学出版部	英語のリーディング能力を伸ばすために編まれた英語リーダー。大学・短大の授業（初期演習）などで使われている。
4. MUKOGAWA English Grammar	共	2008年03月	武庫川女子大学出版部	三宅弘晃，安達一美，稲毛理津子，山根明敏，竹田明彦 武庫川女子大学文学部英語文化学科および短期大学部英語コミュニケーション学科における文法教育のため、英文法の重要な項目を24に分けて説明した。大学「活用文法」短大「コミュニケーショングラマー」の授業にも用いる。
5. Mukogawa English Grammar 2006 - Threshold to University Grammar	共	2006年03月	大和出版印刷	安達一美，稲毛理津子，山根明敏，竹田明彦（分担執筆） 活用文法，コミュニケーショングラマーで使用する教

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著書別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は学会等の名称	概要
1 著書				
				科書。高校時代までの文法事項をまとめ、大学での基礎教育、専門科目への橋渡しを目的として編纂したもの。
2 学位論文				
1. Face-enhancing Intonation in English Discourse	単	1998年01月		会話英語では、イントネーションには上昇、下降、上昇下降、下降上昇中、平坦の5パターンが存在する。この研究で「上昇系のイントネーションは話者が聞き手と共有している情報にアクセスする」「下降系のイントネーションは話者が自分が聞き手に対して情報を与える」というBrazil(1985)の論に基づき、話者が上昇系の使用により聞き手のメンツ(社会的自己イメージ)を、下降系の使用により自分のメンツを保っていることを示した。
3 学術論文				
1. 産学連携によるグローバル人材の育成～国際業務力からの実践的な英語教育の接合～	共	2020年2月21日	第4回武庫川女子大学研究成果の社会還元促進に関する発表会 proceedings (武庫川女子大学教育研究社会連携推進室) pp.25-35	本研究では、産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指す。すでに本学科で行われてきた就職セミナー、サービスマーケティング、企業研修といった「キャリア教育」への取り組みを有機的に接合するため、学生のキャリアに関する学修成果をeポートフォリオに組織化し、エンプロイアビリティを設計する(担当部分:4. 本学科の取り組み ② 就職セミナー、7. 結論)
2. 専門科目「英語の文化的背景」指導:学習者の学びを助ける足場掛けと授業設計(査読付)	単	2018年3月	Mukogawa Literary Review No. 55, 武庫川英文学会, pp.63-73	「英語の文化的背景」という科目において、学習者の学びを助ける「足場掛け」の手法開発とその成果について考察した。
3. 語彙被覆率に基づいた効率的な英語語彙学習教材の作成を目指して～武庫川女子大学語彙プロジェクトチームによる語彙力増強プログラム(査読付)	単	2013年3月	Mukogawa Literary Review No. 50, 武庫川英文学会	◎三宅弘晃, 西嶋久雄, 辻和成, 安達一美 語彙被覆率という概念を導入し、武庫川女子大学英語文化学科の学生の語彙テストを作成、実際にどのくらいの語彙を理解することができるか(受動的語彙数)の計測を自動で行えるようにするための理論的裏付けについて論じた。 1. 英語語彙学習の問題点と課題 において語彙被覆率に関する調査とまとめ、理論的検証を担当。主担当として執筆。 2. 現状把握のための予備テスト作成と結果分析 予備テスト作成と分析を担当。主担当として執筆。 4. まとめ 研究の意義をまとめ、学科で行っているカードシステムに語彙テストを実装することの提案を行った。主担当として執筆。
4. 英語談話における three-part list の第3要素の曖昧性とその教育的意義 - Vagueness in the third factor of three-part lists in English discourse and its pedagogic implications -(査読付)	単	2011年9月	Mukogawa Literary Review No. 48, 武庫川英文学会, pp.17-26.	英語談話において頻繁に生起する three-part list という構造について、言語資料(コンピュータ・コーパス)を利用して生起パターンを分析した。また、この構造の中での第3要素に注目してthree-part list を締めくくると定型があるかどうかを探り、things like that, and so on といった表現が典型的に現れることを示した。この研究の教育的意義として、英語ライティングやスピーキングの中でthree-part listをより積極的に用いることができる可能性も示唆した。
5. 第一言語獲得プロセスから見る Winnie-the-Pooh ～Winnie-the-Poohの風船はなぜ青いのか～	単	2011年3月	Mukogawa Literary Review No. 47, 武庫川英文学会, pp.23-34.	英語児童文学の名作として現在も評価の高い Winnie-the-Pooh について、その物語の音韻的特徴 phonological features ・文体論的特徴 stylistic features ・談話的構造 discourse structures の3つのレベルで分析した。この分析により、Winnie-the-Poohの物語が、第一言語獲得プロセスにおける各発達段階で子どもたちに強く認知されるような構造を持っていることを示した。これは、PALAでの口頭発表(文体論的特徴について)と日本イギリス児童文学会での講演内容(子どもの発達プロセスと談話的構造の関連について)に加えて、音韻的特徴と談話的構造への考察を加えて論文としたものである。
6. 語彙被覆率に基づいた効率的な英語語彙学習教材の作成を目指して～武庫川女子大学英語文化学科語彙プロジェクトチームによる語彙力増強プログラム～	共	2010年3月	Mukogawa Literary Review No. 46, 武庫川英文学会, pp.27-42.	武庫川女子大学英語文化学科語彙プロジェクトチームによる、学生の語彙力増強プログラムをめざす取り組みについて説明した。また、本学に2009年度入学した短大生の1年生5月時点でのTOEICの点数と語彙力(語彙被覆率)の相関関係を調査し、英語テストにおける語彙力の重要性を示した。また、英語教育において、語彙被覆率を上げることの重要性を説いた。【担当部分】執筆は語彙研究に関する文献調査、語彙被覆率の算出、語彙力テスト作成の部分の執筆を担当し、かつ論文全体の構成を主導した。(共著者:○三宅弘晃、安達一美、辻和成、西嶋久雄)
7. Preconsonantal 'r' in Standard	単	2006年03月	Mukogawa Literary Review	イギリス標準発音における r 音についての研究。通

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
British English			iew 41	時的、共時的に概観し、この音の英語音韻体系における重要性を探った。
8. Current Trends in Modern British English	単	2005年03月	武庫川英文学会ニューズレター No. 21	現代イギリスにおける標準的音声（発音）の変遷を、RP (Received Pronunciation) からEE (Estuary English) に至るまで説明した。
9. Tone unit boundaries in Japanese and English monologue data and their relationship with topic management.	共	2003年08月	ICSWC2 Proceedings	MIYAKE, Hiroaki, NOGUCHI, Judy and ISHIKAWA, Yasuhide Prosodic features of spoken discourse carry important communicative information. In this report, we tried to clarify the relationship between prosodic features and how they aid the conveyance of meaning, by focusing on the relationship between topic management and prosodic features. The recorded data were analyzed to show correlation with the increase in pitch range to signal topic shift.
10. コーパス構築に向けて—JACET口語英語研究会の取り組み—	共	2003年08月	JACET関西紀要	石川保茂, 谷村緑, 三宅弘晃, 堀内夕子, 野口ジュディー, 吉田悦子 集めた日本語、英語のデータを分析、小さな音調ユニット (tone unit) に分け、さらに音韻情報を表すタグをつけるための方法を探る。コンピュータによる音声分析の結果、音調ユニットは日、英語にかかわらず0.2秒のsilenceで区切ることで機械的に同定できることがわかった。また、イントネーション曲線の急激な上昇が音調ユニットの上位ユニットであるparatoneの句切れを表すという事実も数量的な研究の結果求められた。
11. Strategic uses of level tone in English conversation.	共	2000年11月	ゼファー	— 平坦調の使用例を見ると、①「上昇系のイントネーションを用いるべきところに代用し、その情報が「至極当然のものである」ことをマークし、聞き手が（ほぼ）不必要な情報にまで注意を払う負担を軽減する働き、②「下降系のイントネーションを用いるべきところに代用し、話し手の過度な情報の押しつけを軽減する働き、③語り手がfloor（話す権利）を聞き手に渡さないことを示唆する、の3つの働きがあることがわかった。
12. Intonational Strategies of Avoiding Face Conflict	共	1999年11月	ゼファー	— Face-enhancing Intonation in English Discourse. に基づいて、この研究では話し手が上昇系のイントネーションをもった音調単位 (tone unit) を付加することで、聞き手との“共感”を強調していることを示した。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
1. 「コンピューターの力」を英語学習に活かす ～コーパスと電子辞書～	単	2016年11月2日	武庫川女子大学附属中学校SE講演会	英語のコーパスの可能性について述べ、英語学習者がいかにコンピュータを利用できるかを考察した。
2. Chains of reference という考え方 ～人は「モノ」をどう呼ぶのか～	単	2016年11月2日	武庫川女子大学附属中学校SE講演会	Chains of referenceという考え方を導入し、英語のディスコースが以下になり立っているかを考察、中級以上の英語学習者がいかにディスコースという概念を身につけるかについて論じた。
3. 日本英語児童文学学会		2007年06月		第一言語獲得プロセスから見る <i>Winnie-the-Pooh</i>
2. 学会発表				
1. 産学連携によるグローバル人材の育成～国際業務力からの実践的な英語教育の接合～	共	2020年2月21日	第4回研究成果の社会還元促進に関する発表会（武庫川女子大学教育研究社会連携推進室）	本研究では、産学連携を通じ、地元企業の英語事情を汲んだグローバル人材育成を目指す。すでに本学科で行われてきた就職セミナー、サービスラーニング、企業研修といった「キャリア教育」への取り組みを有機的に接合するため、学生のキャリアに関する学修成果をeポートフォリオに組織化し、エンプロイアビリティを設計する（担当部分：4. 本学科の取り組み ② 就職セミナー、7. 結論）
2. 「意味」はどこからやってくるのか～ Person Deixis を例に	単	2018年6月22日	武庫川英文学会2018年春季講演会	英語の直示を例にとり、言外の意味がどこから生じるのかを考察した。
3. Why will the balloon be blue? — Phonological development of the story in A. A. Milne's <i>Winnie-the-Pooh</i>	単	2007年08月		Winnine-the-Poohの物語を文体論 (Stylistics) 的な観点から分析する。とくに音韻的前景化 (phonological foregrounding) に着目することで、言語獲得プロセスから見て、幼い子どもたちの理解を促すようにこの物語が書かれていることを明らかにした。（発表言語：英語）
4. Current Trends in Modern British English	単	2004年06月		現代イギリスにおける標準英語の変遷を説明した。
5. Tone unit boundaries in Japanese and English monologue data and their relationship with to	単	2003年08月		Prosodic features of spoken discourse carry important communicative information. In this report, we tried to clarify the relationship between

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
2. 学会発表				
pic management.				prosodic features and how they aid the conveyance of meaning, by focusing on the relationship between topic management and prosodic features . The recorded data were analyzed to show correlation with the increase in pitch range to signal topic shift.
6. 英語談話におけるイントネーションの語用論的価値の分析が抱える利点と欠点	単	2002年09月		会話においてイントネーションは語用論的な価値を持つ。談話データを分析するときには音声情報を併記し、二者（話し手、聞き手）の間で“何”が伝えられているかを見ていかなければならない。しかし、イントネーションが伝えるニュアンスは多岐にわたると同時に、地域、時代によっても細かく異なる。話者がどのような意図でそのイントネーションを用いるかは個人的要素と社会的要素によって影響を受ける。
7. 会話英語におけるトピックの統御について	単	2001年11月		会話英語において、トピック (topic) を統制するときにはイントネーションが大きな役割を果たしている。このイントネーションの急激な上昇によってマークされ区切られた単位のことをparatoneといい、このparatoneの開始には数種類のパターンが見られた。とくにparatone中の第2番目のtone選択がhigh toneで始まる場合にトピックの大きな変化 (major topic shift) が示されることが判明した。
8. 会話英語におけるイントネーションの戦略的使用	単	2000年11月		会話において、イントネーションの上昇、下降という一見小さく無視されがちな音声的“ヒント”が戦略的に用いられていることを示した。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 国際学会 PALA2007 (The 2007 Annual Conference of Poetics and Linguistics Association) 準備委員会メンバー		2006年		
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年2月6日	高大連携 出張講座（附属高校2年生対象）英語を「言語」として考える
2. 2016年11月2日	高大連携 附属中高SE講演会 Chain of Reference という考え方
3. 2016年11月2日	高大連携 附属中高SE講演会 「コンピューターの力」を英語学習に活かす